

「線分の比喩」の意味

The Meaning of Plato's Divided Line

田中 康 司

Koji TANAKA

社会科教育ユニット

(令和3年9月30日受付, 令和3年12月23日受理)

序

プラトンは『国家』Ⅵ巻からⅦ巻にかけて、「学ぶべき最大のもの」(505a)¹⁾としての善のイデアについて三つの比喩を通して説明している。三つの比喩とは太陽の比喩(507a-509b)、線分の比喩(509d-511e)、洞窟の比喩(514a-521b)の三つである。本稿ではこのうち線分の比喩を取りあげる。

プラトンは、太陽の比喩で「見られるもの(ホラートン)」の領域と「思惟によって知られるもの(ノエートン)」の領域を区別し、前者で太陽が果たすのと類比的な役割を後者では善のイデアが果たすことを示す。「見られるもの」というのは私たちが感覚を通して経験する事物のことであり、この感覚的事物は常にあるものではなく、生成変化消滅するものであるため、プラトンはこれを生成物ともいう。一方「思惟によって知られるもの」というのは私たちが知性によって把握するものことであり、これは生成変化消滅することなく常にあるものであるため、プラトンはこれを実在(ウーシア)とよぶが、これはまたイデアとも呼ばれる。

太陽が他の一切の「見られるもの」(生成物)の存在と認識の根拠であるように、善のイデアは他の一切の「思惟によって知られるもの」(イデア)の存在と認識の根拠である、というのが太陽の比喩の要点である²⁾。

さて太陽の比喩で区別された「見られるもの」と「思惟によって知られるもの」を一本の線分上に配置するところから線分の比喩がはじまる。詳細は以下の通り(図1参照)。線分ABを点C

で不等分に分割する。そうすると線分ABはAC(下部)とCB(上部)に二分割される。ACが「見られるもの」(生成物)を、CBが「思惟によって知られるもの」(イデア)を表す。さらにプラトンは分割されたそれぞれ(ACとCB)を最初の分割と同じ比率で分割する。ACを分割する点をD、CBを分割する点をEとすると、ACはADとDCに分割され、CBはCEとEBに分割される。こうして線分ABは四分割され(下からAD、DC、CE、EB)その比例関係は、 $AC : CB = AD : DC = CE : EB$ となる。

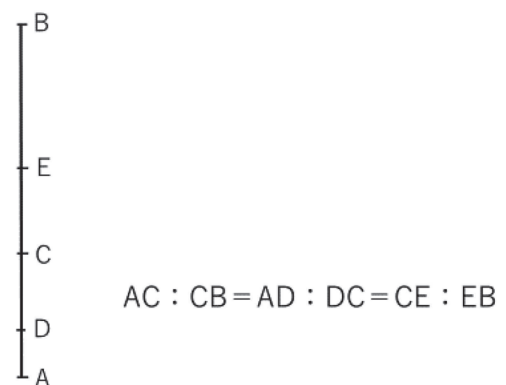


図1

線分の比喩の要点がこの比例関係にあることはいままでもないが、それがどのような比例関係であるかについてはそれほど明らかではない。本稿ではこの比例関係を審らかにするとともに、線分

の四区分がそれぞれ何を表すかを明らかにすることによって、線分の比喩が意味するところを示したいと思う。

第一章

線分を上述のように四分割したのちプラトンは「見られるもの」(AC)を二分割してできたADとDCについて述べる。まずADについてそれが「似像(エイコン)を表す」(509e)とし、似像というのは「まず第一に影、それから水面にうつる像をはじめ、その他稠密で滑らかで明るい構成をもった事物にうつる影像など、すべてこのようなものことだ」(510a)と述べる。続けてDCについては、「いまの似像が似ている当のものを表す」(510a)とし、具体的には、「われわれの周囲にいる動物や、すべての植物や、人工物の類いの全体のことだ」(510a)と述べる。つまりプラトンは、「見られるもの」(生成物)を似像(AD)とその原物(DC)に二分するのである。以下ADを生成物(似像)、DCを生成物(原物)と呼ぶこととする。

このことからいえるのは、先の比例関係が「似像」対「原物」の関係であるということ、つまり「 $AC:CB=AD:DC=CE:EB=似像:原物$ 」ということである。したがってACとCBのあいだにも、すなわち「見られるもの」(生成物)とCB「思惟によって知られるもの」(アイデア)のあいだにも似像とその原物という関係がなりたつということになる。つまりアイデアを原物としたその似像が生成物であるということである。

実際プラトンは「見られるもの」(生成物)を「思わくされるもの(ドクサストン)」と言いかえ、「思惟によって知られるもの」(アイデア)を「認識されるもの(グノーストン)」と言いかえたうえで、「見られるもの」(生成物)における似像とその原物の関係は「思わくされるもの」と「認識されるもの」との関係と等しいと述べている(510a)。

ところでこの言いかえにはどのような意味があるのだろうか。プラトンはその意味を明示的に語っていないが、きわめて重要な言いかえであると思われるので、次章でくわしくみていきたいと思う。いまはプラトンの叙述を追うことにする。

続いてプラトンは、「思惟によって知られるもの」(アイデア)を二分するCEとEBについて述べるが、似像と原物の関係としてではなく、「思

惟によって知られるもの」(アイデア)を探求する方法の違いとして述べる。

CEに対応する探求方法は幾何学をはじめとした数学的諸学に典型的な探求方法³⁾であり、その特徴は以下のとおりである。①出発点としてさまざまな仮設を立てるがそれら仮設を「絶対に動かさないものとして放置し、それらをさらに説明して根拠づけるということができない」(533c)。つまり「自分がほんとうには知らないもの」(533c)を出発点として立て、そこから整合的に探求を進め結論に至る。②その探求にさいして感覚される生成物(原物)を補助的に用いる(510d)、言いかえれば感覚を使用する。

「自分がほんとうには知らないもの」を前提としており、そのうえ思考だけではなく感覚も使用するため、プラトンによれば、この探求方法において魂は、アイデアについて「夢みてはいるけれども、醒めた目で見るとは不可能」(533c)なのである。

数学者が三角形の内角の和が二直角であることを証明する場合を取りあげ敷衍してみる。前提(仮設)となるのは「三角形は三つの線分に囲まれた図形である」という定義であるが、その妥当性は問題にされない。そしてこの三角形の定義をふまえて幾つかの公理(仮設)に基づいて三角形の内角の和が二直角であることが証明されるが、これら公理の妥当性も問われない。そしてたとえばノートなどに目に見える三角形を描き、三角形の一つの頂点を通りその頂点の対辺と平行な線を描いたりして、証明の補助として使用する。しかしこのとき数学者が思考しているのは、もちろんノートに描かれた目に見えるその三角形ではない。その目に見える三角形を介して目には見えない普遍的な三角形を思考しているのである。しかしその普遍的な三角形は根拠づけられることなく仮設されただけのものに過ぎない。したがってそのような思考においては、三角形そのもの(三角形のアイデア)をほんとうに知っているとはいえない。つまり三角形のアイデアを「醒めた目で見ている」とはいえない。せいぜい三角形のアイデアについて「夢みている」としかいえない。

これに対してEBに対応する探求方法はディアレクティケー(534e)と呼ばれるのだが、ここではCEに対応する探求方法の欠陥が克服されている。すなわちディアレクティケーにおいては、CEに対応する探求方法と同じく仮設から出発するが、仮設から上昇して(遡って)もはや仮設ではない万有の始原に到達する(511b)。この万物

の始原とは善のアイデアのことであるが、善のアイデアとは太陽の比喩でいわれているように他の一切のアイデアの存在と認識の根拠である。したがっていったん善のアイデアに到達した後、魂は今度は下降の道を進みすべてのアイデアを総観していくこととなる。そして以上の全プロセスは、生成物（原物）を補助的に用いることなく、つまり感覚を一切使用せず純粋に知性のみによって遂行される(511b-c)。ここでは善のアイデアのもとすべてのアイデアが仮設ではない根拠づけられたアイデアとして把握されており、いふなれば魂はアイデアを「醒めた目で見ています」のである。

概略以上のように線分の四部分を説明したのち、プラトンはその四部分に対応する「魂（プシュケー）の四つの状態」(511d)に名称を与える。すなわち、EBに対応する魂の状態はノエシス（知性的思惟）、CEに対応する魂の状態はディアノイア（悟性的思考）、DCに対応する魂の状態はピスティス（確信）、ADに対応する魂の状態はエイカシア（映像知覚）と名づけられる(511d-e)。

さて以上のことからわかるのは、線分の比喩における線分が、存在者の異なる種族を表しているだけでなく、それと相関的にそれらの異なる種族の存在者を対象として把握するときの魂の状態をも表しているということである。

存在者の種族としては、CBはアイデアを表し、ACはアイデアの似像である生成物を表す。ACの上部であるDCは生成物（原物）を、ACの下部であるADは生成物（似像）を表す。そしてプラトンは明示しないけれども、CBも同じように「原物」対「似像」の比で分割されるはずであるから、CBの上部であるEBはアイデア（原物）を表し、下部であるCEはアイデア（似像）を表す。しかしアイデア（似像）とは何であろうか。先ほどの数学者の例でいえば、「根拠づけられることなく仮設されただけの」普遍的な三角形がこれにあたると思われるが、それがそもそも一体何であるかについては第三章で詳しく見ていくこととして、それまでは暫定的にCEをアイデア（似像）と表記することとする。

魂の状態としては、生成物（似像）を対象として把握しているときの魂の状態がエイカシア、生成物（原物）を対象として把握しているときの魂の状態がピスティス、アイデア（似像）を対象として把握しているときの魂の状態がディアノイ

ア、アイデア（原物）を対象として把握しているときの魂の状態がノエシスである。

なおプラトンによれば、存在者の種族としては、線分の上位部分のほうが下位部分よりも真実性が高くなり、それと対応して、魂の状態としては、線分の上位部分のほうが下位部分よりも明確性が高くなる。したがってアイデア（原物）が最も真実な存在者であり、それに対応するノエシスが最も明確な認識状態だということになる。

第二章

さて本章では、前章で予告しておいたように、言いかえの問題を扱う。プラトンは「見られるもの」における似像と原物の関係がACとCBの関係に等しいというところで、ACを「見られるもの（ホラートン）」から「思わくされるもの（ドクサストン）」へと言いかえ、CBを「思惟によって知られるもの（ノエートン）」から「認識されるもの（グノーストン）」へと言いかえている。この言いかえにどのような意味があるのか。

実はこのように言いかえたところで、ACが生成物でありCBがアイデアであることに変わりはないし、「思惟によって知る」というのと「認識する」というのは同じことであるとみなしてよい。しかし「見る」と「思わくする」が同じとはいえない。そして線分の区分は存在者の異なる種族を表しているだけでなく、それらを対象として把握するさいの魂の状態（精神のあり方）の違いをも表しているのであるから、「見る」から「思わくする」への言いかえは線分の比喩の解釈にとって重要である。では「思わくする」とはどうすることか。

プラトンが「思わくすること」について説明しているのは『国家』V巻末尾においてである。そこでプラトンは「思わくすること」を「夢を見ていること」(476c)に喩え、「夢を見ているということは、眠っているときであろうと起きているときであろうと、何かに似ているものを、そのままに似像であると考えずに、それが似ているところの当の実物であると思ひ違ひすること」(476c)であるという。つまり「思わくする」とは、似像を実物であると思ひ違ひすることである。そして「思わくしている、その精神のあり方」(476d)あるいは「われわれがそれによって思わくする能力をもつところのもの」(477e)をプラトンは「思わく（ドクサ）」とよぶ。なおここでいわれている実物とはアイデアのことであり、そのアイデアに似て

いるものとは生成物のことである。例としてプラトンは美のアイデアをあげ、美のアイデアに似ているものを「いろいろの美しい事物」(476c)としている。

「思わくする」とは単に「見る」ことではなく、生成物を「見た」うえで、その生成物をほんとうはアイデアの似像でしかないのにアイデアのごとき実在であると思ひ違ふことであり、そのさいの精神のあり方が「ドクサ」とよばれるのである。

ところでプラトンは同じ箇所「思わく(ドクサ)」に対比して「知識(グノーメー)」(476d)について説明している。「思わく」が「思わくしている、その精神のあり方」であるのに対し、「知識」は「ほんとうに知っている、その精神のあり方」(476d)であり、「ほんとうに知っている」というのは、実物(アイデア)と似像(生成物)とを取り違えることなくアイデアと生成物とともに観てとることである。そしてプラトンは「思わくすること」を「夢を見ていること」に喩えたのに対し、「ほんとうに知っていること」(476d)を「目を覚ましてしていること」(476d)に喩えている。したがって「ドクサ」と「グノーメー」の違いを比喩的に表現すれば、それは「夢見」と「目覚め」の違いということになる。

線分の比喩の記述は509dから始まり511eで終わり、その後洞窟の比喩の記述が続く。洞窟の比喩の後には哲学者教育に必要な数学的諸学科とディアレクティケーの話になるがその最後のところで再び線分の比喩が語られる箇所(533e-534a)がある。洞窟の比喩以前の箇所(509d-511e)では線分上のACとCBに対応する魂の状態を指す名称は明記されていない。しかしいまみたV巻末尾の議論からして、AC(ドクサストーン)を対象として把握しているときの魂の状態は「ドクサ」と呼ばれ、CB(グノーストン)を対象として把握しているときの魂の状態は「グノーメー」(あるいはV巻末尾で「グノーメー」と同じように「ドクサ」と対比される「エピステーメー」)と呼ばれると考えると問題は無いと思われる。

以上のことから「見られるもの(ホラートン)」が「思わくされるもの(ドクサストーン)」へといかえられたことの意味がはっきりしたと思われる。すなわちこの言いかえによって、ACに対応する魂の状態が「ドクサ」であり、CBに対応する魂の状態が「グノーメー(エピステーメー)」であり、両者の関係が「夢見」対「目覚め」であるということが示されているのである。線分の比喩における比例関係は、存在者間の「似像」

対「原物」に尽きるものではなく、魂の状態間の「夢見」対「目覚め」という関係でもあるのである。

つまり線分の比喩における比例関係は、「AC:CB=AD:DC=CE:EB=似像:原物」と「AC:CB=AD:DC=CE:EB=夢見:目覚め」の二重の関係であるということである。

これをふまえて、エイカシアー、ピステイス、ディアノイア、ノエーシス、そしてドクサおよびグノーメー(エピステーメー)について、その内実を再確認すると次のようになる。

エイカシアーにおいて魂は生成物(似像)を生成物(原物)であると思ひ違ひしている。

ピステイスにおいて魂は生成物(原物)と生成物(似像)を取り違えることなく生成物(原物)をそれとして把握している。

ディアノイアにおいて魂はアイデア(似像)をアイデア(原物)であると思ひ違ひしている。これをプラトンは比喩的に「アイデアについて夢見している」(533c)と表現している。

ノエーシスにおいて魂はアイデア(原物)とアイデア(似像)を取り違えることなくアイデア(原物)をそれとして把握している。これをプラトンは比喩的に「アイデアについて醒めた目で見ている」(533c)と表現している。

ドクサにおいて魂は生成物を実在であると思ひ違ひしている。

グノーメー(エピステーメー)において魂は生成物とアイデアを取り違えることなくアイデアをアイデアとして把握している。

なおエイカシアーについては、それが生成物(似像)を介してその原物(生成物(原物))を推測する状態であるとする解釈もあるが⁴⁾、エイカシアーとピステイスの関係が「夢見」と「目覚め」の関係であるかぎり、そのような解釈はありえない。夢見においてはそこで見られた映像を現実であると思ひ込むしかなく、その映像から夢の外の現実を推測するなどということは起こりえないからである。生成物(似像)を介して生成物(原物)を推測しているとするなら、このときすでに生成物(似像)と生成物(原物)はきちんと区別されているのだから、これはむしろピステイスというべきだろう。

さてこの章を終えるにあたり、名称のことについて触れておきたい。

先ほど触れた線分の比喩が再登場する箇所(533e-534a)でプラトンは一部名称の変更を行っ

ている。511d-eの箇所でも最上位であるEBに割り当てられていたノエーシスが、CBに割り当てられることとなり、最上位のEBにはエピステーメーが割り当てられることとなるのである。

CBが魂の状態としてノエーシスと呼ばれることは、当初からCBが存在者の種族としてはノエートンと呼ばれていたことと整合的である。またエピステーメーは当初はディアノイアを含むものとして捉えられていたのが、より厳格にエピステーメーを捉えた結果、上述のディアノイアの性格からして、ディアノイアはエピステーメーの名に値しない(533c)と考えられるようになり、エピステーメーからディアノイア(CE)を排除して、EBのみを指す名称として採用されたということである。

本稿では以降、図2の通り変更後の名称を使う。

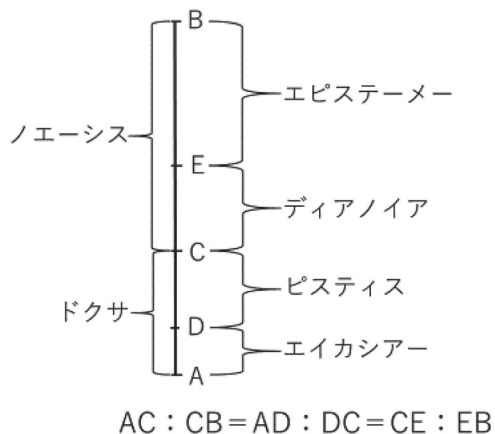


図2

第三章

本章では、線分上のCEが存在者の種族として何を表しているかという問題を扱う。これまでは暫定的にイデア(似像)と呼んできたが、それはいったい何なのか。CB(イデア)を原物と似像に分けたときの似像とはどういう存在者なのか。これについては様々な解釈が提案されてきた⁵⁾。というのもプラトン自身が明言を避けているからである。線分の比喩が再登場する箇所でプラトンは次のようにいう。「しかし、これらの心の状態が対応している対象、すなわち、ドクサの対象となるものとノエーシスの対象となるものを、それ

ぞれ二つに分割して、その間の比例関係を考えることは、グラウコン、やらないでおこう。そんなことをやりだすと、われわれは、いままでたどってきた議論よりも何倍も長い議論の中に、巻き込まれることになるだろうからね」(534a)。

しかしこの言葉はいささか腑に落ちない。なぜなら少なくともドクサの対象にかんしては、プラトン自身がそれを二分割して、かつその比例関係について明記しているからである。すなわちそれによれば、ドクサの対象を二分割したその一方(AD)は「影や水面等にうつる影像やその類いのもの」であり、もう一方(DC)は「動物や植物や人工物の類いの全体」であり、両者の比例関係は「似像」対「原物」である(509e-510a)。にもかかわらず「ドクサの対象となるものを二つに分割して、その間の比例関係を考えることはやらないでおこう」とはどういうことか。

おそらくプラトンはADとDCの関係を一見そう見えるように、単純に「似像」対「原物」の関係と捉えることが不十分であるということをおおとしたのではないかと思われる。本稿のこれまでの考察からわかるように、「似像」対「原物」という比例関係に「夢見」対「目覚め」という比例関係を重ね合わせてはじめて線分の比喩の十分な理解となるということである。そしてプラトンは「夢見」対「目覚め」という比例関係を、前章で検討した名称の言い換え等によって暗に示唆してはいるが、明示してはいないのである。このような事情がプラトンの「比例関係を考えることはやらないでおこう」という言葉になったと思われる。

「似像」対「原物」という比例関係に「夢見」対「目覚め」という比例関係を重ね合わせてはじめて線分の比喩の十分な理解となるという本稿の解釈が正しいとするならば、エイカシアーは生成物(似像)を生成物(原物)と思い違いすることであるのだから、エイカシアーの対象は単なる生成物(似像)ではなく、生成物(原物)であると思込まれた生成物(似像)であるということになる。そしてピステイスは生成物(原物)と生成物(似像)を取り違えることなく生成物(原物)をそれとして把握することなのだから、ピステイスの対象は単なる生成物(原物)ではなく、生成物(似像)と明確に区別して把握された生成物(原物)である。たとえば、水面に映った月を実物の月であると間違っ判断するのがエイカシアーであり、実物の月であると誤って思込まれた水面の月がエイカシアーの対象ということにな

る。それに対して、実物の月と水面に映った月を明確に区別し、実物を実物として把握するのがピステイスであり、水面に映った月から明確に区別され実物として把握された月がピステイスの対象である。このように実物とその似像が明確に区別され、似像が似像として実物が実物として把握されているため、自分が何を知覚しているのかについて確信が持てるのである。したがってこのような知覚における魂の状態をプラトンはピステイスつまり「確信」と名づけたと思われる。

さて問題はノエーシスの対象の二分割である。プラトンはノエーシスをエピステーメーとディアノイアに区分するが、ノエーシスの対象の二分割についてはほとんど何も言わない。したがってノエーシスの対象をドクサの対象と同じ仕方でも二分割してよいのかどうかも本当のところはわからない。しかしプラトンがドクサの対象とノエーシスの対象を同一線上に一定の比率で配置しその同じ比率でそれぞれの対象を二分割したということ看重視するなら、ノエーシスの対象をドクサの対象と同じ仕方でも二分割することが妥当であると思われる。そうでない方がむしろ奇妙である。

したがって、ノエーシスの対象は、それを「似像」対「原物」の比で分割し、そこに「夢見」対「目覚め」の比を重ね合わせることで、エピステーメーの対象とディアノイアの対象へと分割されることとなると考えるのが妥当である。

ということで、まずはとりあえずアイデア（ノエーシスの対象）を「似像」対「原物」の比で分割してみよう。そのさい押さえておかなければならないのは、そうやって分割されたそれぞれはいずれもアイデアであるということである。それはちょうど生成物（ドクサの対象）を「似像」対「原物」の比で分割したそれぞれが、存在の位相としては異なる位相にあるとしても、いずれも生成物であるのと同じである。実物の月も水面に映った月もいずれも見られ生成変化消滅する生成物である。したがってエピステーメーの対象がアイデアであるのと同じようにディアノイアの対象もアイデアである。ディアノイアの対象が生成物であるということはない⁶⁾。ということでここからは第一章で暫定的に導入したアイデア（似像）及びアイデア（原物）という表記を再び用いることとする。

さてアイデア（似像）が似像たるゆえんは何処にあるのか。第一章で、CEにかかわる数学的諸学に典型的な探求方法（ディアノイアにおける探求

方法）とEBにかかわるディアレクティケーという探求方法（エピステーメーにおける探求方法）の違いを説明し、前者が把握するアイデア（たとえば普遍的三角形）は根拠づけられず仮設に留まるが、後者が把握するアイデアは根拠づけられもはや仮設ではないということを指摘した。この違いは何処にあるかということ、前者においては魂が万有の始原である善のアイデアにまで上昇しないため、魂が把握するいかなるアイデアも善のアイデアとの関わりが断ち切られており、したがってごく限られた範囲内でのつながりのもとでしか把握されないのに対し、後者においては魂が善のアイデアにまで上昇し、すべてのアイデアを善のアイデアを頂点（中心）としたつながりの中で把握するということにある。すなわち善のアイデアを中心としたアイデア連関全体（アイデア界）の中で把握されたアイデアがアイデア（原物）であって、善のアイデアから切り離されそれゆえ全体の連関からも切り離された限定的なアイデア連関の中で把握されたアイデアがアイデア（似像）である。たとえば数学者が把握する普遍的三角形は他の数学的アイデアとの連関（数学の世界）の中で把握されるアイデアではあるけれども、数学的アイデア連関（数学の世界）自体が善のアイデアを中心としたアイデア連関全体（アイデア界）から切り離されているのである。したがってそれはアイデア（原物）とはいえず、アイデア（似像）でしかないのである。つまりアイデア本来の居場所であるアイデア界において把握されるのがアイデア（原物）であり、アイデア本来の居場所から切り離されたところで把握されるのがアイデア（似像）であるということである。たとえていえば、月本来の居場所である夜空で把握されるのが実物の月であり、月本来の居場所ではない水面で把握されるのが似像の月でしかないのと同じである。

以上の分割に「夢見」対「原物」の比を重ね合わせると以下のようなになる。

たとえば数学者は自らが把握した普遍的三角形を、すべての目に見える三角形（生成物としての三角形）の原型（原物）でありしたがってアイデア（原物）であると思込んでしまうのである。それは善のアイデアを中心としたアイデア連関全体（アイデア界）の中にその場所をもたないためアイデア（似像）でしかないにもかかわらずそうなのである。

ディアノイアにおいて魂は善のアイデアを中心としたアイデア連関全体（アイデア界）から切り離されたアイデアしか把握することはできない。したがってそれはアイデア（似像）でしかないが、魂はそれ

を生成物の原物であるとみなしアイデア（原物）だと思い込んでしまう。このようにアイデア（原物）と思い込まれたアイデア（似像）がディアノイアの対象である。

一方、エピステーメーにおいて魂は、善のアイデアを中心としたアイデア連関全体（アイデア界）の中でアイデアを把握するため、アイデアをほんとうに知っているのであり、アイデア（似像）をアイデア（原物）と取り違えることはない。このように善のアイデアを中心としたアイデア連関全体（アイデア界）の中で把握されたアイデア（原物）が、エピステーメーの対象である。

結語

最後に線分の線分たるゆえんを述べて本稿を閉じることとする。魂の異なる四つの状態が連続した一本の線上に割り当てられているということは、それらが連続して展開していくことを表している。魂はエイカシアの段階からピステイスの段階へと発展し、ピステイスからディアノイアへ、そして最終的にはディアノイアからエピステーメーへと発展していくのである。それは真の實在（ウーシア）をめぐる認識の進展のプロセスである。最下部において魂は生成物（似像）を真實在だと思い込んでいる。そのような夢から醒め魂は今度は生成物（原物）を真實在であると思いつむ。しかしこれも真実から遠く離れた夢見の状態でしかない。さらなる目覚めが必要である。その目覚めにおいて魂はアイデア（似像）を真實在であると思いつむこととなる。真の目覚めに少しは近づいたがまだまだ夢の中である。真の目覚めにおいて魂は、アイデア（原物）が真實在であることを、そして一切のアイデア（原物）のはるか彼方に超越してあり⁷⁾、それらを統べている善のアイデアこそが真實在の真實在であることを知るのである。

最低の認識と最高の認識の間には乗り越えがたい隔絶があるように見えるけれども、両者は連続した一本の線上にあるのである。つまり現在どの認識レベルであろうとも最高の認識へ通じる道のうえに誰もが立っているのである。このことを表すためにプラトンは線分を用いたのではないかと思う。

さてどうすれば目覚めることができるのだろうか。それによってのみ真理を見ることのできる魂のある器官、これをプラトンは比喩的に魂の目(533d)と呼ぶのだが、目覚めるためにはその魂

の目が浄化され、ふたたび火をともしなければならぬ(527d-e)。これについては稿を改めることにしよう。

註

- 1) プラトン『国家』からの引用等はステファヌス版全集の頁数とアルファベットを本文中に括弧書きで示した。また日本語訳については基本的に岩波全集版の藤沢令夫訳に準拠したが、一部文脈にあわせて改変したところがある。
- 2) このことは以下の言葉に端的に表わされている。「太陽は見られる事物に対して、ただその見られるというはたらきを与えるだけではなく、さらに、それらを生成させ、成長させ、養い育むものである。(略)同様にして、認識の対象となるもろもろのものにとっても、ただその認識されるということが、〈善〉によって確保されるだけでなく、さらに、あるということ・その实在性もまた、〈善〉によってこそ、それらのものにそなわらうようになるのだ(略)」(509b)。なお引用中の「認識の対象」とはアイデアのことであり、「〈善〉」は善のアイデアのことである。
- 3) CEに対応する探求方法が数学的諸学に限定されるのかそれとも数学的諸学は典型的ではあるけれども一例に過ぎないのかという問題は興味深いだが、本稿では扱わない。
- 4) R.Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, 2nded., Oxford 1953, pp.190
- 5) N.D.Smith, "Plato's Divided Line", *Ancient Philosophy* vol.16(1996), p.32
- 6) CEがDCと同じく生成物を表すという解釈がある。EBがアイデアであることは明らかであり、EBとCEの間に「原物」対「似像」という関係があるなら、CEはアイデアの似像ということになり、アイデアの似像とは通常は生成物のことである、というのがその理由である。またプラトンのように線分を分割するとDCの長ささとCEの長ささが等しくなることもこの解釈の根拠となっている。しかし本稿はこの解釈をとらない。
- 7) 「〈善〉は實在とそのまま同じではなく、位においても力においても、その實在のさらにかなた超越してある」(509b)。「〈善〉」が善のアイデアを、「實在」が善のアイデア以外のアイデアを指す。

